

## 美術品のほんもの・にせもの

(元) 大阪市立博物館々長

(現) 大阪府文化財愛護推進委員

森口 隆次

### はじめに

長く博物館に勤めている間にいろいろな経験をしました。そこで「ほんもの・にせもの」の問題に出会い、いろいろなことを感じました。今日は「鑑定の仕方」ではなく、そこから感じたことをお話します。

### 1. 「なんでも鑑定団式」美術品評価の危うさ

テレビで「なんでも鑑定団」という番組があり私も好きで良く見ているが、あれを見ていて博物館に長く勤めてきた私共が見ても「良くここまで知っているものだな」と感心し勉強になることがある。いろいろな鑑定士がいるが、特に中島誠之助氏には感心する。ただ、「なんでも鑑定団」で一つ気になることがある。本物か偽物かにスパッと分けて、しかもそれを金銭に置換えて評価する。ああいうことがちょっと気になる。あれを見ていて、一体あの後である品物はどうなるんだろうと思う。ダメといわれた人、当然本物と信じていたのに「何千円」というような鑑定をされてがっかりしてしまう。ダメといわれた品物はもう放ってしまうのか、下手をすると燃やされてしまうのか、と思う。「物には罪はない」のであって、偽物だったらそれを造った人が悪い。博物館の人間は、偽物でも何とか引導を渡してやりたい。「山川草木悉皆成仏（さんせんそうもく・しっかいじょうぶつ）」とあって「全てのものには仏性がある」と、この比叡山は教えている。偽物であっても文化財であるに違いない。文化財には本物ではなくても、それなりに意味のあるものが沢山ある。物を鑑定する場合に、あのように「なんでも鑑定団式」に割り切ってしまう、ああいうのはどうかな？と思う。



私は博物館に四十年ほど勤めたが、その間にいろいろな品物を見てきた。本来、博物館は物を鑑定しないが、伝手（つて）を頼って来られたらやむを得ず見ることがある。その場合、「これは結構なもので、本物に間違いありません」とはっきり言えるのは、良くて十に一つ、あるいは百に一つかもしれない。残りの九つあるいは九十九はダメな物で、ダメなときの引導の渡し方は難しい。よほどの知り合いか気心の知れた人には「落款（らっかん）、印章が合っていない、画風がおかしい、紙が新しい」などとはっきり話すが、それ以外の場合は「ちょっと分かりません、あまり人に見せん方がよろしい」と答え、うやむやにすることが多い。しかし、このダメな物というのは、偽物で無価値かということ必ずしもそうではない。長い間博物館にいと分かるが、はっきり騙す目的、金儲けのために造ったと思える偽物もごく僅かにはある。本物があつて、悪意のある偽物があつて、その中間にあるもの、殆ど90~98%くらいのもものは「本物ではない物・悪意のない偽物」である。これには以下に述べるいろいろな文化的背景がある。

### 2. 封建社会が必要とし、需要に応じて造られた“にせもの”

#### (1) 切腹を押しとどめた短刀、薬研藤四郎吉光（やげん・とうしろう・よしみつ）

大阪市平野区に正覚寺というお寺があり、その境内の片隅に小さな五輪塔がある。その横にある碑文によると畠山政長の墓である。この政長という人は室町幕府の三管領（さんかんれい）の一人である。室町幕府は足

利将軍の下に三人の有力大名、細川、畠山、斯波氏がおり、これを三管領というが、彼等と将軍家との合議制で政治が行われた。この管領職は世襲制だったが、代が進むと子供が生まれなかったり、意見が食い違ったりしてギクシャクしてくる。そのうちに畠山家の当主である持国が亡くなるが、子供の義就（よしなり）が小さいために弟の政長が養子となって家督を継いだ。良くある事だが「本家の子供が大きくなったら譲る」という約束が、権力の座につくと反故（ほご）にしてしまう。そんなことで成長した義就との間に跡目争いが起こる。

それが発端となり、有力大名の山名宗全や細川勝元らが絡んで、天下の争乱となったのが「応仁の乱」である。この時、山名宗全が陣を構えたところが今の西陣という。応仁の乱の真最中に、畠山政長は大阪（河内）の正覚寺に陣を構えた。応仁の乱というのは京都が舞台のように思われているが、河内・和泉の利権争いが絡んでいたのが大阪も戦場になっていた。正覚寺の政長に対し、河内の誉田（こんだ）あたりに陣を構えていた義就は夜襲をかけてきて、多勢に無勢で政長はとうとう義就軍に負けてしまった。政長一族は正覚寺の本堂に集まって車座になり、政長が真中に座り「いざ切腹」となった。政長は愛用の短刀を自分の腹に刺そうとするが、手がしびれて三度刺そうとしたが刺さらなかった。それを見ていた家来の一人が、自分の短刀をとって自分の太股にズブッと刺して「殿、これならよく切れますよ」と差し出した。そこで畠山政長は怒った。家来に怒ったのではなく自分の短刀に怒った。「日頃から名刀と思って大事にしていたのに、肝心な時にさっぱりいうことを利かん」といって放り投げた。そしたら横にあった「薬研（やげん）」、鉄の舟みたいな形で薬を調合するものにブスリと刺さった。政長は結局家来の短刀で自害して果てる。後にこの政長の短刀は、「主君の腹に刺さるのを嫌がって、切腹を押しとどめた」として、江戸時代に「薬研藤四郎」の名前で非常に有名であった。

鎌倉時代の京都に粟田口藤四郎吉光という短刀造りの名人がいた。この人の造ったもので国宝や重要文化財になっているものが沢山あるが、長い刀は一本もないので有名である。政長の持っていた物はまさしくこの粟田口藤四郎吉光の短刀である。後にこの短刀は、松永弾正、織田信長、豊臣秀吉・秀頼、徳川家康・秀忠まで伝わったことが分かっているが、現在は行方不明となっている。

## (2) 吉光の「本物ではない短刀」が多い理由（わけ）

政長と同じような話が徳川家康にもある。武田信玄が京都に上ろうとする時、駿府の家康は目の前を武田軍に通られるのは「武門の名折れ」といってちょっかいを出す。例の三方が原の戦いだが、蹴散らされて散々な目にあってお城に帰る。さすがの家康も、「俺もこれでお終いだ」とやっぱり切腹しようとする。ところが、やはりどうしても腹に刺さらない。政長は家来の短刀で果ててしまうが、さすがに家康は「愛刀が主人の死をいさめた」と悟って思いとどまり、それで後に天下に大を成すに至った。この時の短刀もまた吉光である。そういうことがあったので、江戸時代になるとあらゆる刀の中で吉光が天下第一の剣だ、家を守ってくれる刀であると定められた。およそ大名と名のつく者は（一万石以上、江戸時代三百六十余侯がいた）必ず吉光の短刀を持たねばならないと定められた。

吉光は確かに短刀造りの名人で、現代にも沢山残っているが、いかに吉光といえども三百六十余侯の需要に見合う短刀を打っているはずがない、また実際はない。江戸時代の常識として「大名の家には必ず吉光があるものだ」という掟、約束事が広まってくると、大名になった以上は「吉光を持っていない」とは言えなかった。そのために適当な古い短刀、鎌倉時代くらいの短刀に「吉光」と銘を入れて持ったり、当時刀剣鑑定の家柄であった本阿弥家に頼んで鑑定してもらった事にして、朱で「吉光」と入れてもらったり、あるいは室町時代に土佐で同名の「吉光」という刀鍛冶がいたがその刀でも良しとされた。つまり、「本物、偽物を問わない江戸時代のしきたり、文化的約束事」という背景の下に、「大名として吉光を持たねばならない」という需要に応

じて作り出された「吉光」が沢山存在する。「お宅の吉光を是非拝見させてください」などということは絶対しなかった。お互いに承知の上で持っているわけである。ただ、「吉光」という短刀があるということであればそれで良かった。ところが、現在はそういうことが忘れられて、大名家なら伊達家伝来や島津家伝来の吉光、お公家さんなら近衛家伝来の吉光などともてはやされる。博物館にいた時に私が鑑たかぎり、全て「本物でない吉光」であった。

### (3) 身分社会の建前（たてまえ）を守るために作られた、本物ではない文化財

将軍家や大名家に子供が生まれた場合に、必ず「国光」という銘のある刀を贈るとというのが、これまた江戸時代の約束事であった。「国光」は、かの有名な「正宗」の祖父にあたる刀鍛冶である。子供が生まれるたびに「国光」の刀を贈るから徳川家に国光が沢山集まってくる。そうすると今度は家来に恩賞として国光を下げ渡す。その場合、これが「本物か、偽物か」は全く問題にならない。ただ、「徳川家から貰った」という事実が大事なのである。短刀の良し悪しは殆ど問題にされなかった。

絵の事例を挙げると、国持ち大名クラスでは「中国の徽宗皇帝とか雪舟の絵」を持たなければならない。大名や家老クラスだと「狩野元信、探幽、土佐光信」とかの絵を、地方の庄屋クラスだと「宗達、応挙、蕪村」くらいの絵を持たねばならない。お正月には名家なら必ず床の間に身分相応の絵を飾るという約束事があった。これを守るために、多くの家では身分に応じて旅絵師に雪舟や応挙の絵を書いてもらい床の間に飾った。それでも良しとされた。江戸時代、いわゆる封建社会というのは身分社会であると同時に、身分に応じて、金があろうとなかろうとしなければならない約束事がきちんと決まっていた。格式みたいなもの、武家ならある身分になったら必ず小者を何人か雇わねばならない。門構えやお正月の門飾りもきちんとしなければならない。そのようないわゆる本音と建前の社会があって、建前を守るために造られた「本物ではない文化財」が沢山ある。

### (4) 「本物ではない偽物」に潜む、歴史を解く手がかり

神社、仏閣に何かをお祈りする時に刀を奉納する習慣がある。「是非これこれのことをお願いします」と刀を奉納する。また、それが叶った時に「ありがとうございます」と刀を奉納する。大阪だと住吉神社、四條畷神社、奈良には興福寺の「南円堂」などがある。奉納する時には神様に「私はこの貴重な刀を奉納したくらい、お願いするんですよ」という意味を込めている。それで適当な刀に「正宗」と書いて奉納したり、あるいは「国光」と書いたり、その人の懐具合に応じて買える程度の刀に、高価で有名な刀鍛冶の銘を彫って奉納する。決して神様を騙しているわけではない、神様は全てお見通しであるから。「私はこの刀を、正宗を奉納したと同じくらいお願いしている」あるいは「国光を奉納したと同じくらい感謝している」という意味で、神社に「本物ではない刀」を沢山奉納した。もちろん、談山神社のように本物が奉納されているところもある。本物ではない刀、いわゆる「偽物（ぎぶつ）」は山ほどある。それが時たま、某神社の、あるいは某お寺から出た物である、として世に出回って困ることがある。そのもの自体は「偽物」であるけれども、「悪意のある偽物」ではなくて、封建社会の約束事を守るために造られた品物であったり、神仏にお願いするための手段としての作り物なのである。こういう物が博物館に持ち込まれた時に、はっきり「偽物です」と言ってしまうと、刀だったら川に放り投げられたり、折られたりする。絵なら粗末に扱われたりする。いくら偽物であっても、二百年以上も前に造られた物が多いものを、一概に「ダメな物」と決めつけてはいけない。むしろ、ここから隠された歴史や文化あるいは家柄とかを読み解くことができる。

四国のある村で、探幽や雪舟の絵を沢山持っているというので行ったら全部偽物であった。「平家の落人」の言い伝えがあるこの村は、体面を保つために代々にわたり村の財産として、有名絵描きの絵を集めてそれを大事に現代まで伝えてきたが、博物館の調査によって偽物と分かった。しかし、このような物があることによ

って、その村の歴史や伝統がわかる。現在その村は貧しいが、過去においてはそのようなお宝を持つほどの必要性、栄光があったことを物語っている。だから、「偽物だからダメ」としてしまうのはよろしくないのである。博物館としては、祖父から伝わった物がたとえ偽物であったと知らせるにしても、当時の祖父の気持ちや経済状態に思いをはせ、「お爺さんを偲ぶよすがとするように」と言ってお返りする。

### (5) 偽物があるのは「文化的レベルが高い国家ないしは社会」の証拠

世の中、偽物が沢山ある。しかし、真実は案外「本物ではない偽物」、グレーのところに隠されているのではなかろうか。偽物造りの罪は対象が文化財であり、ある種の文化に対する罪、文化的罪悪であると思う。しかし、「悪意のない偽物」は必ずしも悪いものではない。偽物は文化的需要のないところには絶対存在しない。偽物があるというのは、特に古美術に対する偽物があるというのは、古美術品が尊重される国家ないしは社会である。そういう文化的レベルの高い社会に偽物が生まれてくる。

## 3. 悪意のある偽物造りの手口

### (1) 模写

そうは言っても「悪意のある偽物」はいけない。骨董店で騙す目的で造られた「悪意のある偽物」をしばしば見ることがある。一番多いのがやっぱり「模写」である。絵の達者な人を養成して、本物を横において、それをきれいにそっくり模写する。四十年間博物館にいて一度だけ経験したことだが、ある人の家から「ちょっと勉強したいから」といって絵を借りてきて、それを写してから本物と取り代えて返した、というケースがあった。

### (2) 時代にせ

皆さん良くご存知の雪舟という絵描きがいるが、彼と同じ時代の人に小栗宗湛(そうたん)という人がいる。この人は文献上しばしば出てくるし実際に絵も存在する。小栗宗湛も将軍家に召し抱えられるほどの優秀な絵描きで技倆的にも雪舟とよく似通っていて肩を並べるほど有名であった。現在は雪舟の絵が圧倒的に多くて、小栗宗湛の真筆とされるものはごく僅かしか残っていない。どう考えても、室町時代に両者同じくらいの作品を発表しているはずである。ところが江戸時代になると雪舟の評価が高くなり圧倒的に有名になるので、皆が雪舟の絵を欲しがった。そこで、宗湛の絵の落款を切り取って後から雪舟と入れる。雪舟の絵とされる中に宗湛作ではないかと思われるものがかなりある。この場合、全く同じ時代で技倆も殆ど一緒であり、もう偽物とはいいいにくい。

桃山時代に「国広」という刀鍛冶がいた。九州は飫肥(おび)の国の侍だったが、主家が滅び山伏になって諸国を流れ歩き最後に京都の堀川に住みついた。桃山時代以降の刀を新刀というが、国広の刀は新刀の元祖として今でも需要が多い。国広を見ると欲しがる人が多いが、この国広の弟とも弟子とも言われる人に国安がいる。国安の本物は国広に殆ど引けをとらないくらい上手である。二人とも同じくらいの数の刀を作っているはずであるが、現在残っている刀は10対1で国広が圧倒的に多い。国広が五百万なら国安は二百五十から三百万で、刀としての出来は良いが有名度が違うために国安は半値である。国広が圧倒的に残っている理由は、国安の銘を消して入れ替えたことによる。刀の銘というのは、溝がめくれて盛り上がっているもので、これを上手に戻すと平らにすることが出来る。そこに「広」と入れると国安の刀が国広に化けてしまう。これは「時代にせ」といって出来栄が同じなのでよほど研究しないとわからない。時代も技倆も出来栄も同じ、紙を調べても古い紙、こういう偽物は実際わからんものである。

### (3) 新旧合作

以前、北陸の博物館から「鎧がでたので来て欲しい」と頼まれて行ったことがある。「鎧」というのは胴や

袖などにいろんな部品があるが、良く観るとところどころが古い。小札（こぎね）という小さな鉄板に穴があいていて糸で綴ってあるものが、一部は古いが他は良く似ているものどうも新しい。これは古いのと新しい鎧を分解して、古いものを二つ造ってしまうやり方である。

仏像にもそういうことがある。平安時代中期以降の仏像は「寄木造り」といって腕とか膝などが外れる。そこで古い仏像を一度バラバラにする。そして今度は彫刻家を養成してそっくりな物を造らせ、新しい物と組合わせて古い仏像を二つ造るやり方である。そういうのを見ると、古い金箔も残っているが、一部はどうも木の調子がおかしい。こういうのは半分本物で半分は偽物であり、本物か偽物（ギブツ）か迷ってしまう。

#### (4) 分割

日本画は紙に描くが、紙というのは植物の繊維をどろどろにしてスノコに何度か流して漉（す）きあげる。和紙は繊維が大体六層くらいに重なっている。竹ベラを隙間にもぐらせ上手に使うと、一枚の紙から二～三枚に剥ぐことが出来る。扇子が骨の両側から紙を貼るのではなく、一枚の紙を割って骨を挿し込んで作っているように、和紙は割ることが出来る。墨で書かれた書でも、上手に剥がして一つの書からまったく同じ物が二つできる。墨というのは繊維のかなり奥まで入っている。この場合は顕微鏡で観ると容易に分かる。

以上のように、騙す手口にはいろいろあるが、このような悪質な偽物というのは「案外稀なもの」である。

### 4. 騙されない五つの戒めと鑑識眼の養成

#### (1) 有名作家の名前に惑わされるな

私が博物館に入った頃に、東京国立博物館に野間清六という学芸員の有名な先輩がおりました。この方が騙されない五つの戒めを言っている。物を買ったり持ったりする場合は、有名な作家の名前に惑わされてはいけない。偽物というのは必ず誰でも知っているような、刀なら虎徹、国広、正宗あるいは吉光とかに圧倒的に多い。「これは応挙の絵で・・・、ある有名な方が所蔵していた物で・・・」などと持ちかけてくる。有名作家のものほど偽物が多い。

#### (2) 本来は高い物だが、それよりちょっと安い物に惑わされるな

「まともに買ったなら一千万は下らないが、この際八百万で・・・」と持ちかけられる。大体、五万や十万のものに偽物はなく千万単位のものに偽物が多い。偽物を造るのにも手間がかかるしリスクもある。「ちょっと安く手に入りそうだ」というものは、たいてい危ないものだ。

#### (3) 古めかしい物に注意せよ

本当にいい物というのは、絵、蒔絵、彫刻あるいは刀でも、その物が出来てから現在に至るまで大事にされる。本当にいい物は、今出来たもののように新しく見える物が多い。偽物ほど、煤で汚したりこすったりしてどこか古めかしく見せている。いかにも古めかしく見える物に注意すべきである。

#### (4) 伝来のもっともらしい物に注意せよ

「某大名家、某公爵家、某神社あるいはお寺から出たものですよ・・・」というような伝来のもっともらしい物に注意しなさい。これは売る側も偽物と知らないで間違っている場合がある。必要に応じて造られた「本物ではない物」が多い。

#### (5) 欲を出さず惚れて持つこと

「これを持っていたらいつか値上がりするだろう」というのが絶対いけない。やはり自分が欲しいと惚れ込んだ物を持つのが一番良い。その場合は持った喜びがあり、持っている間中楽しむことが出来る。結果的に本物でなかったとしても「仕方がない、勉強だった」と諦めがつく。「なんでも鑑定団」を見ていると、「借金のかたにもらった。あるいは家を建ててやったが、お金の代わりに骨董をもらった」などの話がでてくるが、そ

れだったら、当人がそれを売ってお金を払えばいいと思う。お金の換算して物を持つということが一番よろしくない。

#### (6) どうやって鑑る眼を養うか

「なんでも鑑定団」に戻るが、「先祖代々伝わった応挙の絵である」というのをテレビ画面で見て、「どうしてこんな下手な絵をいいと思っているんだろう」と思う。自分の鑑識眼を高めるには「たくさん見ること」が一番である、と同時に一つのいい物を何べんも何べんも観ることが大事である。好きになった物、本当にいい物を毎日毎日見る。私は博物館で刀を扱っていたが、何百何千の刀を眼の中にファイルしている。たまに国宝、重要文化財クラスの刀が博物館に入ってきたら、宿直の時など一晩中、ためつすがつ見たことがある。本当にいいものに沈溺(ちんでき)するという見方も大切である。そうすれば自ずと物が見えてくるものである。

#### おわりに

私は岩手県水沢高校の出身で東北大学に入りました。東北大学に十年間おりましたが、最初は国文学で古典を勉強し途中から美術史に変わりました。助手の時に、大阪に博物館を作るという話があり、博物館創設準備室に入りその後ずっと大阪におります。その間にいろんな物を観て、いろんな人と交わり、博物館というのは「単に物を鑑賞するだけではなく、物を通じて歴史なり社会を考えるとこらだ」ということが、だんだん分かるようになってきました。今まで話してきたように、古美術品の世界において本物は一握りしかない。悪質な偽物もごく僅かにはあるが、残りは全部「本物ではない偽物」である。その中身を調べてみると、その家その社会の辿ってきた歴史をひも解く手がかりが潜んでいる。全ての文化財に仏性があり魂がある。これが現代の我々にいろんなことを話しかけてくれる、と博物館に勤めていて感じたことです。

今日は「宮沢賢治の会」で、本来は賢治の話ができれば良かったのですが、一人の博物館人の経験をお話しました。雑ばくな話で失礼しました。

#### 質問 骨董品の定義はどんなことですか？

答え はっきりした骨董品の定義はありません。年代で言えば明治初期から江戸末期よりさかのぼって作られた物、大体百年以上経過した物を目処にしていでしょう。

(本稿は平成20年9月21日の賢治忌における、延暦寺会館での講演を基に加筆修正したものです)

関西宮沢賢治の会

〒530-0001 大阪市北区梅田1丁目3番1-900 大阪駅前第1ビル9階

岩手県大阪事務所・関西岩手県人会内 (Fax 06-6344-5969)

発行・編集代表者 深田 稔



講演司会 村上忠夫 副会長

外部からのお問い合わせ

Tel 06-6231-4301 (岩手日報大阪支社、大阪市中央区高麗橋2-4-6)